

Number.13
2012/3

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

News Letter

演劇・映像の国際的教育研究拠点



- 特集記事1
国際シンポジウム
「ACTING—演じるということ—」
- 特集記事2
国際シンポジウム
「16～18世紀演劇の諸問題」
- 特集記事3
国際研究集会
「中国映画史への新たな視点」

- 活動報告
 - 日本演劇研究コース P5
 - 東洋演劇研究コース P5
 - 西洋演劇研究コース P6
 - 映像研究コース P8
 - 芸術文化環境研究コース P9
 - 舞踊研究コース P10
- イベントカレンダー P2
- 新刊紹介 P11～12
- 編集後記

特集記事 ① 報告

国際シンポジウム「ACTING—演じるということ—」

2012年1月27日(金)・28日(土)・29日(日) 早稲田大学国際会議場

本拠点活動の掉尾を飾る研究イベントが、本年1月27日・28日・29日の三日間にわたる国際シンポジウム「ACTING—演じるということ—」である。われわれの活動の総決算として、六つの研究コースの総力を挙げて取り組み、分野横断的な試みを実施した。

われわれは本拠点発足の当初、演劇学と映像学の統合を目標として掲げた。これはもちろん学問分野として両者を融合しようとするものではなく、両分野の研究者が共に同じ場で研究し、学ぶことにより、新しい学術的な展開を目指すというのがその趣旨である。そしてこの5年間を通じて、映像コースは日本演劇、東洋演劇、西洋演劇をはじめとする複数のコースと協力することにより、無声映画フィルムの探索・調査範囲の拡大を達成し、また演劇・舞踊分野では貴重な映像資料を複数発見するなどにより、研究対象が立体化したと言ってよいほどの展開を遂げた。さらに芸術文化環境研究においては、全コースを横断するテーマを次々に提案して毎週1回以上のペースで精力的な活動を展開した。研究生のレベルでも、異分野交流が研究の多様な可能性をもたらし、世界的な学会で研究発表をするチャンスが、あらゆるジャ

ニルの研究生に与えられた。こうした活動の総まとめとして、われわれすべてに共通するテーマである「演じるということ」を追及しようというのが、今回のシンポジウムの大きな目標であった。

初日は午後開始で、前半に3分科会に別れての若手の研究発表があり、西洋演劇と日本演劇、映画史と映画理論、舞踊という配分でそれぞれ4本ずつの発表があった。第1室は秋葉裕一副館長、第2室は小松弘映像研究コース・コースリーダー、第3室は筆者がそれぞれ司会を勤めたが、二室にわたる映画研究の充実が印象的であった。発表のレベルはそれぞれ非常に高く、いずれも論文化を強く望みたい。午後の後半は児玉竜一教授によるアルペール・カーン博物館で新たに確認された現存最古の演能映像と京舞映像の紹介。その後劇団東京乾電池主宰の柄本明氏と岡室美奈子本学教授との対談「ある俳優の演技論」が行われた。

第2日は午前と午後の前半で各コース主催の6分科会が行われたが、いずれも魅力的なテーマであった。午後の後半はブレヒトをテーマとする講演とパネルディスカッションで、これも東洋・西洋両演劇コースの共同作業となった。



対談「ある俳優の演技論」



日本演劇研究コース分科会



記念講演「シェイクスピア翻訳の楽しさ」

第3日は、舞踊・映画・演劇の三分野の海外招聘講師の「演じるということ」に焦点を合わせた卓抜な講演と、翻訳のあり方を語る小田島雄志氏の滋味あふれる記念講演があり、最後に若手研究者とコースリーダー各氏の、それぞれによるこの事業の総括が行われた。

1月末という研究者にとってはまことに多忙を極める時期にこれを設定したのは、一つには震災の影響による。海外の研究者に安心して参加して頂くためには、この時期しかなかった。このような条件下にも関わらず、参加者は三日間を通算して600名を超えた。用意した会場が本学で最大級であったのに対し、決して多い数ではないが、各発表内容は非常に面白く、十分な手応えを感じる研究集会になった。

(拠点リーダー・事業推進担当者 竹本幹夫)



パネルディスカッション「グローバルCOEがもたらしたもの 第1部 若手研究者の立場から」

2011年度第4回グローバルCOE博士論文成果報告会

EVENT CALENDAR

演劇博物館グローバルCOE拠点では、当拠点に在籍中に博士論文を完成させ、提出した若手研究者に、ご自身の論文について発表していただく報告会を開催しております。

日時：2012年3月2日(金) 13:15～18:10

会場：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

13:15～13:20 開会挨拶(拠点リーダー 竹本幹夫)

13:20～14:30 「アメリカ映画史におけるラジオの影響」

仁井田千絵(映像研究コースGCOE 研究生/2011年度早稲田大学提出)

14:30～15:40 「独脚戯、滑稽戯と上海」

森平崇文(東洋演劇研究コース研究協力者/2010年度東京大学提出)

<休憩10分>

15:50～17:00 「ベケット作品における円という形象—時間、機械、身体の表象をめぐる—」

景 英淑(西洋演劇研究コースGCOE 研究生/2011年度早稲田大学提出)

17:00～18:10 「オフエンバックの芸術的戦略としての「夢幻オペレッタ」

—1870年代パリの演劇文化の変容と「二流劇場」におけるミドルカルチャーの誕生—

森 佳子(西洋演劇研究コースGCOE 研究生/2011年度早稲田大学提出)

特集記事 ② 西洋演劇・日本演劇研究コース共催

国際シンポジウム「16～18世紀演劇の諸問題」

会場：早稲田大学大隈講堂（小講堂）

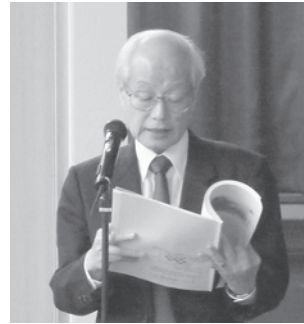
第1日「女優の誕生」 11月25日（金）14:00～17:00

第2日「劇場・舞台」 11月26日（土）10:00～18:45

第3日「信仰・教育と演劇」 11月27日（日）10:00～17:45

世界中で今日普通に見られる演劇の「祖型が形成された」と思われる時代（16～18世紀）を中心にとり、日本・東洋・西洋演劇の国際比較を目指す国際シンポジウムである。日本演劇研究コースと西洋演劇研究コースの共催で、本来なら2011年6月に開催予定だったが東日本大震災ほかの影響で同年11月に延期され、多少変更はあったがほぼ予定通りのプログラムで無事に開催することができた。国内外からの参加者など協力いただいた数々の方々への感謝とともにここに報告する。

初日は、フランスで自ら発見した貴重な資料をまじえて17世紀の女優の誕生についての講演【戸口民也（長崎外国語大学教授）】に始まり、その後に活躍したフランスの初期女優についての新聞記事の紹介【オディール・デュスト（早稲田大学教授・GCOE研究協力者）】、日本の珍しい「女性の俳優」についての考察【児玉竜一（早稲田大学教授・GCOE事業推進担当者）】があった。2日目はGCOE研究生二人【青柳有利子、西村光弘】の研究発表のあと、ヨーロッパに残る古い劇場の現存状況の紹介【チェコから来日のパヴェル・スラフコ（チェスキークルムロフ博物館館長）】、中国・明清時代の神廟劇場の多様な舞台についての紹介【曹飛（山西師範大学准教授）】、コルネイユの仕掛け芝居『アンドロメード』の変化する舞台装置と当時の舞台機構についての考察【橋本能（中央大学教授）】、日本独自の劇場建築構造とその演劇空間の変遷【賀古唯義（（公財）文化財建造物保存技術協会修復建築家）】、フランスとイタリアの初期劇団の成立とその進展についての講演【ミカエル・デブレ（上智大学准教授）】がなされた。3日目はGCOE研究生三人【落合理恵子、木村涼、榎本恵子】の研究発表のあと、イエズス会の学校演劇の真の意義についての講演【イタリアから来日のブルー



ナ・フィリッピ（ペルーシア大学教授）】、ラシーヌが教育を受けたポール・ロワイヤル修道院の教育と彼の演劇についての考察【萩原芳子（明治大学教授）】、世阿弥『風姿花伝』の「神儀篇」を通して一座の芸能と信仰の問題を追究した講演【竹本幹夫（早稲田大学教授・GCOE拠点リーダー）】、最後に清代後期の演劇教育の特徴についての考察【王星荣（山西師範大学教授）】があった。（いずれも敬称略）

多くはスライド映写があったので分かりやすく、各国のほぼ同時代の演劇をつぶさに比較できて大いに参考になった。「女優の誕生」については、さらにイタリアや中国の初期事情が付加されるならばより深まると考えられたし、「劇場・舞台」に関しては、中国の神廟劇場の正方形の舞台と日本の能舞台とは深い関係がありそうで今後の比較研究の課題と思えたし、「信仰・教育と演劇」については、各国それぞれの演劇教育が信仰のためばかりでなく人間がいかに生きるかの教えであることを痛感させられた。総じて演劇の国際比較の必要性を思い知らされた有意義な国際シンポジウムであった。

（早稲田大学名誉教授・GCOE研究協力者 伊藤洋）



特集記事 ③ 映像研究コース:

国際研究集会「中国映画史への新たな視点」

2012年1月14日(土) 13:00 ~ 17:10 戸山キャンパス36号館681教室



映像研究コースは、2012年1月14日に、国際研究集会「中国映画史への新たな視点」を開催した。研究集会当日は、センター試験と日程が重なっていたにも関わらず、GCOE関係者以外にも多くの方々にご参加いただき、また日本各地でご活躍される中国映画・演劇研究を専門とされる先生方にも数多くご参加いただいたことにより、活発な学術交流が行われることとなった。

映像研究コース(映画史)中国プロジェクトは、GCOE事業推進担当者の小松弘教授、GCOE研究協力者の佐藤秋成氏、GCOE研究助手の山本律の3人をメンバーとし、GCOE事業発足直後より、中国における調査によって数多くの映画資料を収集し、多くの研究者・収集家へのインタビューを行い、とりわけ戦前期の中国における映画文化の研究を行ってきた。このたびの国際研究集会では、その中でも特に独自の研究と言える、最初期の中国映画史の問題について研究報告を行うと同時に、我々の研究に様々な示唆を与えてくださった、中国の著名な映画史家である上海大学の石川(Shi Chuan)教授をお招きして、中国映画史における、重要でありながらこれまでほとんど明らかにされてこなかった問題についての講演、研究発表、討議を行った。

研究集会では、まず山本が「中国の映画揺籃期における映画上映」と題し、発表を行った。本発表では、山本がGCOE紀要『演劇映像学 2009』第1集において公開を行った中国における最初の映画上映とそれを取り巻くものについての再検討、また2011年10月8日に開催された「日本中国学会 第六十三回大会」において公開を行った1897年に中国で映画上映を行ったクック、ジョンソン、シャルベという人物の映画上映活動とその評価についての研究を基礎とし、彼らが映画上映を行った背景についてさらなる考察を加えた。

続く小松弘教授による講演「初期中国映画における他者のまなざし」では、清朝末期に上海で発行されていたフランス語新聞『L' Echo de Chine』などを一次資料に、他者、つまり当時の上海に暮らしていた欧米人による視点からの租界の中における映画文化についての講演が行われた。当時の上海の映画文化を考える際に租界があったことを無視することはできない。しかし『L' Echo de Chine』を一次資料に用いた中国映画史研究はこれまで全く行われてこなかった。新たな事実が次々と提示された本講演は、まさに中国映画史へ新たな視点を投げかけるものであった。また講演では、1990年代初期において中国を撮影した世界初公開となる秘蔵映像も上映され、参加者からの強い関心を集めた。

休憩を挟み、次に上海大学の石川教授による講演「民国期の映像の断片と早期記録映画の実践」が行われた。石川教授は、2011年10月12日、13日に中国で開催された「早期記録映画と国民革命映像档案試写シンポジウム」において世界初の公開上映となった1898年から1932年の間に中国で撮影された14部45本の貴重な映像資料が投げかける問題点について、多くの写真を提示されながらお話しくくださった。最後は、今回行われた発表、講演、映画上映について、参加者全員による活発な討議が行われた。

末筆となるが、石川教授、ご参加くださった多くの方々、またこれまで我々の研究に示唆を下された多くの方々、当日通訳を務めてくださった早稲田大学大学院生の依田菜津子氏、洪井君也氏に改めてお礼申し上げたい。

(研究助手 山本律)



日本演劇研究コース：

活 動 報 告

当グローバルCOEが発行するNews Letterも本号が最終号となる。日本演劇研究コースの活動報告欄では、事業推進担当者それぞれのグローバルCOEにおける活動を総括的に報告する。
(研究助手 原田真澄)

■能楽班 活動報告

本コースの教育活動の基本は、毎週木曜日5限のGCOE研究指導における『申楽談儀』輪読と論文指導、および加賀藩研究会における『葛巻昌興日記』輪読である。前者は正規授業、後者は8月を除きほぼ毎月開催している。このほか能楽の源流を調査研究するために、散楽研究、舞台構造及び東西演劇史の比較研究、吉田文庫の文献調査を中心に行い、これらに関連して毎年大規模研究集会を催した。2007年「散楽シンポジウム」、2008年「日英近松プロジェクト」の実験公演とシンポジウム、2009年「吉田東伍」シンポジウム(能楽学会との共催)、「演劇舞台構造の国際比較研究会」、2010年シンポジウム「観世寿夫とは何だったのか」、2011年「16～18世紀演劇の諸問題」などがそれである。中国山西師範大学、チェコ国立音楽演劇大学、ストラスブール大学、トリア大学等との研究交流や現地での国際シンポジウム、チェスキークルムロフ城や山西省の舞台遺構、韓国仮面劇等の調査を行った。また海外よりの招聘講師による集中講義、若手研究者による留学生のための古典講読講座、同じく中国語講座なども開催し、いずれの企画にも研究生がこれに参加した。以上の研究プロジェクトの多くが分野横断的なもので、複数分野との共催事業も少なくない。

(拠点リーダー・事業推進担当者 竹本幹夫)

■日本演劇および民俗芸能研究班 活動報告

グローバルCOEでは、2009年度に「荒事―歌舞伎の様式と発想を考える会」を立ち上げて、7月18日(土)・19日(日)に戸山キャンパス演劇映像コース室で研究会を行った。元禄歌舞伎のやつし論とからめて独自の荒事論を展開する佐藤恵里氏(高知女子大学)、野郎歌舞伎の研究を中心に見得の発生についても独創的見解をもつ武井協三氏(国文学研究資料館)を講師に招き、郡司正勝先生の研究手法といわれる歌舞伎の芸態論のなかでも、その中心に位置する荒事論をとり

あげ、従来の研究史を整理しつつ、新たな荒事研究の可能性について、様式と発想の両面から検討した。

また、11月22日(月)・23日(火)に高知県仁淀川町池川神社で池川神楽見学会を催した。武井氏・佐藤氏と和田のほか、本学の大学院生数名、撮影スタッフとして学部学生数名が現地に赴き、神楽を見学。地元保存会や関係者との交流を深めるとともに、歌舞伎研究と民俗芸能研究の可能性や課題などについて、武井・佐藤両氏を中心に熱心な討論を繰り広げた。

2010年度も継続の予定だったが、メンバーの都合により中止となった。
(事業推進担当者 和田修)

■近世演劇研究班 活動報告

グローバルCOEの活動には、最後の二年間で加わったので、全期間を通しての総括を述べるべき立場にはない。グローバルCOEでの催しものに、外部から参加することは必ずしも多くなかったが、内部からはほぼ毎回の出席と発表その他を課せられたので、その対照はいささか極端でもあった。個人的な偏りであるかもしれないが、当節、いずれの大学でも様々な催しに忙しく、興味はあっても、必ずしも足を運ぶまでに至らないのはお互い様であり、グローバルCOEの催しがどれほど外部に届いたかは、今後に俟つことだろう。

一方、院生諸君を中心とした研究活動をふり返れば、博士論文輩出の原動力となったことは否みがたく、その内数冊は単行本として刊行を見たことは何としても大きい。日本演劇という領域は、海外からの講師招聘といった恩恵に預かる機会が少なく、国際性という点では孤立しがちであるが、文楽や能、京舞の在外フィルムを発掘・紹介し得たことは、そうした中では幸運なことであった。ただ、そうした恵まれた成果とは別に、演劇研究の細分化と尖鋭化の一方で、演劇というものの自体の社会性・一般性が大きく後退し続けている現状には、目を背けずにいる必要があるだろう。グローバルCOEプログラムによる成果が、演劇復興への力を持つか否かは、むしろこの期間が終了したのちに問われてゆくこととなるだろう。音声資料をめぐる研究会活動でも、そうした環境整備をめざしたつもりである。

(事業推進担当者 児玉竜一)

東洋演劇研究コース：

活 動 報 告

■2011年度下半期の特別講義

本コースでは2011年度下半期に中国から二人の研究者をお招きし、特別講義を開催した。10月15日には杭州師範大学人文学院教授の黄愛華氏に、「笑舞台と文明新戯後期の劇壇」というタイトルでお話いただいた。黄愛華氏は2007年の春柳社百年シンポジウム(早大)、2009年の清末民初新潮演劇シンポジウム(華南師範大)に続き、本コースの企画にご協力いただくのは今回で三度目となる。講義では、1910年代から1920年代の上海で文明戯上演の拠点となった「笑舞台」について、参集した演劇人、演目、制度など複

数の観点から最新の研究成果を披露され、講義後は来聴者との間で活発な討論が行われた。

また12月10日には、研究協力者の摂南大学教授瀬戸宏氏の招聘で来日中であった上海戯劇学院教授で中国シェイクスピア学会副会長の曹樹鈞氏に、「中国の舞台におけるシェイクスピアの伝播と受容」というタイトルで講義をお願いした。1902年に上海で『ベニスの商人』が上演されて以来の中国におけるシェイクスピアの受容史を、時代ごとの特質や代表的な作品に触れつつ講じられたが、日本語通訳が入ったため(研究生陳凌虹氏担当)、中国演劇を専門としない複数の研究者の来聴もあり、多様な学術交流が行われる貴重な機会となった。

■国際シンポジウム「ACTING—演じるということ」

演劇博物館GCOEの総括として2012年1月27～29日に開催された国際シンポジウム「ACTING—演じるということ」において、東洋演劇研究コースはシンポジウムのテーマと従来の研究活動との交点にある話題として、中国の「三大演劇体系」を取り上げた。「三大演劇体系」とは、梅蘭芳、スタニスラフスキー、ブレヒトの三者を指し、「三大」という括りに対し様々な疑義が呈されているものの、その影響力の大きさから中国の劇界では一種の常識とされている概念である。今回はロシア演劇を中心とした欧州演劇史が専門で、上記三者を扱った『三角対話』という著作のあるアモイ大学教授陳世雄氏、および演劇美学を専門としブレヒト、梅蘭芳、湯頭祖などに関して多くの論考がある武漢大学教授の鄧元江氏をお招きし、コース分科会においてそれぞれ中国におけるスタニスラフスキーシステム受容史と、梅蘭芳の演技の近代化に関する講演をお願いした。

その後上記二氏に加えて國學院大學名誉教授の里見実氏、演劇博物館副館長の秋葉裕一氏に登壇いただき、中国、日本、ラテンアメリカにおけるブレヒト受容に関するパネルディスカッション「非西欧圏におけるブレヒト受容」を開催した。各パネリストの報告により、同じブレヒトといっても時代や社会状況に応じて受容の様態にきわめて大きな差異のあることが明らかになり、短時間ながらも充実した会合となった。

■演劇博物館グローバルCOEを振り返って

東洋演劇研究コースは実質的には中国演劇研究コースとして活動し、事業推進担当者および研究協力者の専門領域に基づいて、おおよそ古典戯曲、近現代の伝統演劇、話劇の三分野をカバーしてきた。とはいえ人口面積ともに他の地域とは桁違いの中国では、在来の演劇だけでも300種以上、



さらに祭祀から舞台芸術に至るまで演劇を支える社会環境をも考慮すれば、扱うべき領域ははなはだ膨大なものとなる。一方で日本国内の中国演劇研究者の数は極めて少なく、本コースも両者のギャップの間で右往左往してきた印象がある。

しかしながら、たとえば21世紀COE時代に開催していた文明戯研究会が春柳社百年シンポジウムとして結実し、それが清末民初新潮戯劇シンポジウムへと引き継がれて恒常化するなど、特定の分野では内外の研究者の相互的ネットワークが順調に成長してきている。また国外の中国演劇研究者の間で早稲田大学演劇博物館に対する認知度は以前より遥かに高まっており、グローバルCOEが終了しても、こうした無形のつながりは、以後中国演劇研究の国際的発展の基盤となっていくだろう。

これまで歴代の研究助手をはじめ、館長ほか各事業推進担当者、GCOE事務局、研究協力者、研究生の皆さんには、コース運営のために多大なご協力を賜った。最後に改めて御礼を申し上げたい。
(事業推進担当者 平林宣和)

西洋演劇研究コース：

活 動 報 告

■比較演劇研究（秋葉裕一）

GCOE最終年度を迎えて、海外の研究者との研究交流が根付いてきたことを実感している。これが成果の海外発信につながり、日本語以外での発表の機会が増えてきた。J・クノプフ／J・ルケーゼーといったブレヒト研究者との連携、H=T. レーマン／E・フィッシャー＝リヒテといった演劇理論研究者との共同作業、S・ショルツ＝チョンカ／A.レーゲルスベルガー／E.グロスマンといった日本演劇研究者との意見交換。こうしたドイツ語圏を中心とした交流の積み重ねに加え、去る1月の国際シンポジウムのおかげで、陳世雄／鄧元江といった中国のブレヒト研究者との間にも新たな協力関係が生まれている。日独比較演劇のさらなるグローバルな展開が期待できる。

■【現代文学の演劇化をめぐる総合的研究】（貝澤哉）

昨年度に引き続くかたちで、ご本人と著作権者の協力のもと「川村毅／見沢知廉」の書簡類の翻刻を進め、対象資料の再テキスト化がほぼ完了した。今後、考察と同時に、資料の学術的紹介も予定している。

■ポストコロニアル演劇研究会（澤田敬司）

日時：2012年2月4日（土）15：00～17：00

題目：映像で追うスリウカ

場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

講師：石井達朗（舞踊評論家、GCOE研究協力者）、中村雅之（横浜能楽堂副館長）、佐和田敬司（GCOE事業推進担当者）

横浜能楽堂の企画で初演されたダンス『Susuriwka（スリウカ）-willow bridge』、及び当作品の制作過程を追った映像『A Battle on the Bridge—The Creation of Susuriwka』の上映を行なった。上映後の鼎談では本プロジェクト事業推進担当者の澤田と、横浜能楽堂副館長の中村雅之氏、慶応義塾大学名誉教授の石井達朗氏で、先住民による伝統の再創造と真正性をめぐる諸問題、舞台芸術としての先住民の文化を我々はどう鑑賞するのかなど、海外での動向との比較も含め考察が行なわれた。

■フランス語圏舞台芸術研究プロジェクト（藤井慎太郎）

2011年度後期は、海外から講師を招聘しての講演会を中

心に研究活動を行った。

オープン・イベント エゴヤン + カンジャン

日時：2011年10月15日(土) 14:00 ~ 20:40

場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

Citadel, Next of Kin, Speaking Parts上映後(協力：特定非営利活動法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭)、映像作家で映画監督のアトム・エゴヤン氏と女優アルシネ・カンジャン氏によるティーチ・イン(逐語通訳付き)を開催した。

イザベル・ロネ(パリ第8大学教授)による舞踊をめぐる3つのレクチャー

現代舞踊研究の第一人者であるロネ教授をお招きし、舞踊研究コースとの共催で、「舞踊 記憶(再)引用 想起」という共通テーマのもと、ダンスをめぐる連続講演会を開催した。

1. 2011年11月7日(月) 18:30 ~ 21:00、早稲田キャンパス26号館302会議室
「ダンスの「作品」とは—ニジンスキー振付『牧神の午後』、あるいは舞踊作品の影響圏をめぐる」
2. 2011年11月9日(水) 13:00 ~ 15:30、早稲田キャンパス26号館302会議室
「自伝に見るダンサーの形象—イザドラ・ダンカンとモリス・ベジャールの場合」
3. 2011年11月11日(金) 18:30 ~ 21:00、早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室
「ジェローム・ベルにおける「引用」の作業」

クリスティアン・ピエ教授講演会

演劇史・演劇美学を専門とされ、拠点主催の国際シンポジウム「ACTING—演じるということ」での講演を機に来日されたピエ教授(パリ・ウエスト・ナンテール大学)による講演会を別途開催した。

1. 2012年1月25日(水) 18:30 ~ 20:30、早稲田キャンパス26号館302会議室(西洋演劇論講座)
「エリザベス朝時代の演劇について—イギリスとフランスの関係を中心に」
2. 2012年1月30日(月) 18:00 ~ 21:00、早稲田キャンパス26号館302会議室
「演劇と政治：介入の様態とインパクトの追求『ルワンダ94』の場合」

■シェイクスピア・ゼミ(冬木ひろみ、本山哲人)

日時：2011年11月12日

題目：コンテンポラリー・シェイクスピア—今、ここで、東北の私たちが

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：下館 和巳氏(東北学院大学 教養学部教授)

本講演会では、シェイクスピア研究でも第一人者であり、自分の劇団を率いて東北弁によるシェイクスピア劇を上演し続けている下館氏を招聘することで、机上だけではない、舞台上の生きた台詞の理論について拝聴でき、また議論も深めることが出来た。言葉の壁と民族の固有性にも触れる講義を通じて、研究生も大きな刺激と思考の広がりを得ることが出来た。

日時：2011年11月12日(土) 13:00 ~ 15:00

題目：Community-Based Theatre in the United States

and the United Kingdom

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：Yuko KURAHASHI(倉橋 祐子氏)(Kent State University, Associate Professor)

演劇のプロと地域共同体との対話は、演劇研究においてこの15年ほどで重要なものとなってきているが、まだ十分に検証がなされているとはいえない。そこで、本講演会では当分野の専門家である倉橋氏によって、アメリカとイギリスの地域を基盤とした演劇がどのように行われているのかが、具体的な例や映像とともに紹介された。

日時：2011年11月23日(水) 15:30 ~ 17:30

題目：Hamlet Onstage in the Late 18th and Early 19th Centuries

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：David Bevington氏(シカゴ大学 名誉教授)

これまでシェイクスピア・ゼミでは、様々な視点から「テキストと上演」の関わりを探ってきたが、翻案劇やテキストの書き換えが盛んに行われ、シェイクスピア劇が頻繁に上演されていた18世紀から19世紀にかけて検討する機会がなかった。そこで、今回の講演は、上記の時代に焦点を絞り「テキストと上演」の問題が時代背景によって変容するという、これまでシェイクスピア・ゼミでは扱われてこなかった視点を得ることが出来た。質疑応答の時間にも活発な議論が交わされ有意義な講演会となった

日時：2011年11月26日(土) 15:30 ~ 17:30

題目：Shakespeare and Religion

場所：早稲田キャンパス9号館第1会議室

講師：David Bevington氏(シカゴ大学 名誉教授)

シェイクスピア作品は様々な形で宗教的な要素が使われており、そのために作品と宗教問題を絡めて議論されることがしばしばある。今回の講演は、16世紀の芝居と言葉を通して行われていた宗教論争がどのようなかわりを持つのかということを取り上げ、これまでになく広い視野から、シェイクスピア・ゼミの中心的課題であるテキストもしくは言葉と上演の関係性についての考察がなされた。Bevington氏は2011年7月に『ハムレット』に関する著書を発表したばかりであることもあり、質疑応答においても、世界的に著名な研究者の最新の研究の話を直接伺うことができる、非常に貴重な機会を得ることが出来た。

■オペラ/音楽劇の総合的研究(丸本隆)

オペラ研究会では、月に1~2回の研究会を中心に活動を行っている。今年度、11月以降これまでに行われた研究会は以下の通りである。

日時：2011年11月19日(土) 16:00 ~ 18:00

場所：早稲田キャンパス7号館ファカルティラウンジ・ミーティングルーム

発表者：山口康昭(新潟医療福祉大学・専任講師)

題目：「人はどのように歌い、踊り、演技するのか?~人体解剖学から観る舞台・身体表象から考える舞台~」

演技や発声のメカニズムが、解剖学の見地から、具体的な分析とともに明らかにされた。

日時：2011年12月24日(土) 13:00 ~ 15:00

場所：早稲田大学小野記念講堂

発表者：平井李枝（GCOE 研究生）

題目：「グラナドス作曲《ゴイエスカス》とゴヤの絵画～オペラの原曲であるピアノ曲集《ゴイエスカス》から読み解く「ゴヤ」の世界（ピアノ演奏による解説付き）～」

グラナドスがゴヤの絵画の世界観を音楽でどのように表現しているのか、その作曲技法や物語性などについてピアノ演奏を交えながら検証された。

日時：2012年1月21日（土）14：00～18：00

場所：早稲田キャンパス6号館318教室

テーマ：「1920・30年代ドイツにおけるオペラ創作と映画の発想」（シンポジウム形式）

発表者と題目：白井史人（GCOE 研究生）「映画化という“上演”——ヴァーグナーとシェーンベルク」、中村仁（GCOE 研究生）「パントマイム/サイレント映画/オペラ—1920年代のヒンデミット、ヴァイルのオペラ作品における舞台と音楽」、広瀬大介（国立音楽大学講師）「1920年代のリヒャルト・シュトラウスにおけるオペラと映画：「ばらの騎士」映画版と「インテルメッツォ」」

1920、30年代のドイツ語圏で活躍したオペラ作曲家たちに光を当て、その作品の創作/上演において「映画化」の発想が持っている意義が検討された。

日時：2012年2月25日（土）16：00～18：00

場所：早稲田キャンパス6号館318教室

講師：米谷毅彦（歌手・聖徳大学大学院講師）

題目：「Classic音楽が意味する“Class”、その階級意識…東洋人として、欧州の舞台に立った日々より」

米谷氏に、オペラ歌手としての活動と経験について、歌や音楽を交えながらお話し頂いた。

また、11月8日と12月20日に、オペラ・音楽劇研究の現状をめぐって議論する研究会を開催した。

■17世紀フランス演劇研究会（オーディール・デュスッド）

下記の研究会を開催したほか、11月に日本演劇研究コースとの共催で国際シンポジウム「16～18世紀演劇の諸問題」を開催した（特集記事2）。

日時：2011年10月15日（土）15：00～17：00

場所：早稲田キャンパス6号館318教室

講師：秋山伸子（青山学院大学教授）

題目：「モリエールのコメディ＝バレエ『町人貴族』について」

この作品が宮廷バレエの様相を呈していること、この作品において音楽やダンスが果たす役割について検討された。

（研究助手 奥香織・菊地浩平）

映像研究コース：

活 動 報 告

国際シンポジウム「ACTING—演じるということ」の開催は、映像コースにとって映画における演技論を新たに考えるというよい機会を与えてくれた。演技とは実際それを見る者にとってはナラティブを形成するイリュージョンの問題であるし、それを演ずる者にとっては身体や声による表現の問題であるが、我々はこのシンポジウムの問題設定をACTINGということに定めることで、見る者である我々の意識をより演ずる者の方に接近させたいと思う。演技者でもなければ、普通は演技はナラティブの次元に解消されることで満足してしまう。より身体の次元が現実化している舞踊は、演ずることを最も直接的に訴え、舞台上の生身の俳優たちに接する演劇もそれにある程度準ずるだろうが、身体がイメージに還元された映画においては、演じるということは撮影現場の演出を覗くことでもない限り、アクチュアルな問題意識を見る者に与えづらい。一般に「あの役者の演技はよかったねえ」などとは言いが、一体何がよかったのか？ 映画を見ることにおいて本当に映像内の役者の演技が見る者の意識の中に対象化され得たのだろうか。とりわけ、グローバルCOE映像コースの研究生に私が期待したのは、自分の研究領域の中で映画の俳優による演技という問題設定を各研究生がいかに考えるかというのを見ることであった。私の期待に研究生たちは十分答えてくれたように思う。

研究生による発表は1月27日シンポジウム初日に行われた。谷口紀枝氏は明治期大正期の新派映画を演劇および小説とのかかわりにおいて研究されているが、今回は「初期時代の文芸映画にみられる演技形態について」と題して、あえて新派および新劇の両方に共通する文芸映画という概念を論の中心に据えた。この概念によって、日本で公開された外国映



画からの影響も捉えやすくなるだろう。実際の所、残存フィルムの少ない初期日本映画の演技形態を実証的に論じるのはかなり難しいのだが、豊富に残っている外国映画、とりわけフランスおよびイタリア映画に見られる俳優の演技形態は、日本映画の演技形態に関する仮説を作り上げるのに、非常に有効であろう。

ヨハン・ノルドストロム氏は、PCLについて研究しているが、今回はPCLのミュージカル映画を取り上げ、その中にヴォードヴィルの演技が取り入れられていることを指摘する。日本におけるミュージカル映画の定義には難しさがある。初期サウンド映画では概して音楽や歌の挿入が規範であったから、ミュージカル映画というジャンルが仮にあったとするなら、狭義のジャンル概念を提示せねばならないだろう。そのあたりが若干曖昧な発表であったが、映像の中にヴォードヴィル的な演技の実例をよく見出した研究になっている。

仁井田千絵氏はラジオ・ドラマという、いわば肉体を欠いたナラティブにおける映画俳優の役割を、アメリカ映画史の

コンテキストにおいて実証的に論じた。この発表においては、必ずしも演じるということが中心になってはいなかったが、俳優の神話性が映画のみならず、その身体は見えなくてもラジオにおいても効果的であったことは、この研究の独自性を示すものであろう。

小川佐和子氏は1910年代のイタリア映画におけるディーヴァたちの特徴的な演技を分析する発表を行った。彼女たちの濃厚な演技は、ディーヴァ映画の主題と形式に密接なつながりを持ち、それらは他のいかなる芸術にも見られない独自の価値を持つものであることが、この研究で明らかとされている。

GCOE研究生の発表に続いて、シンポジウム2日目には韓国国立芸術大学のキム・ソヨン先生による韓国映画における

他者の問題を扱った講演が行われた。キム先生は死へと結びつくタナトスとしての登場人物を1960年代～70年代の韓国映画を例に説明された。最終日には、イェール大学のチャールズ・マッサー先生が、アル・ジョルスン主演の映画を例に、ユダヤ人や黒人の表象が1920年代後半から1930年代初めにかけてハリウッド映画の中でどのように形成されていたかを論じた。

映画研究においては演技の問題は決して主要なテーマとされてこなかった。しかし、この問題は今回の各論者の発表でも示されたように、非常に多様な可能性を持つものであることが明らかとなった。映画固有の演技の問題について、我々はやっと目を向け始めたところである。

(事業推進担当者 小松弘)

芸術文化環境コース：

活 動 報 告

芸術文化環境研究コースは、芸術を美学的な対象として把握するだけでなく、芸術が作り出される場に注目し、これを環境としてとらえ、そこに影響を及ぼす要因を政治・政策、法律、経済、教育、雇用・余暇などの複数の観点から分析し、その相互作用がいかなるかたちで、現実の実践と制度に反映されているのかを考察することを目的として5年間の研究活動を進めてきた。具体的には、世界の文化／舞台芸術政策、都市の文化政策、演劇とナショナリティ、フェスティバル研究、ドラマトゥルク研究、文化外交、人材育成といったテーマを大きな柱として、研究者だけでなく「現場」の人間も含めて、国内外から多数の講師を招いて継続的に研究会を開催してきた。学内に文化政策を専門に研究する研究者や大学院生が少なかったことを補う意味も込めつつ、研究を外部に向かって開くことをつねに意識し、学外の研究者・実践者・組織と連携することを重視し、ほぼ毎週のペースで研究会を主催し、そのほとんどを広く一般に公開してきた。芸術文化環境を研究することのうちに、一方では研究対象（現実）から出発しつつも何らかの方法論に基づいてそこから批評的距離をとろうとする側面が、他方ではその対象に意識的に働きかけてその変化を促そうとする側面もある。そのような自覚のもと、劇場法（結局、いまだ制定されないままである）や東日本大震災に関するフォーラムに代表されるように、時事的な問題もおそれず取り上げてきた。

私自身、研究者としての知識も経験も不十分なままに、西洋演劇研究コース（フランス語圏舞台芸術研究プロジェクト）との二足のわらじをはきながら、芸術文化環境研究コースの運営にもあたることになって、周囲にも甚だしく迷惑をかけたことと思う。だが、私自身の苦勞も生半可ではなかったし、またそのおかげでずいぶん鍛えていただいたようにも思う。拠点の支援を受けて、また国内外の多くの方々に支えられて、クリスティアン・ビエ、クリストフ・トリオー著『演劇学の教科書』（国書刊行会、2009年3月）の共同翻訳出版をコーディネートできたこと、国際研究集会「演劇・舞踊・芸術環境 日仏交流の20世紀」を2009年11月26～28日の3日間にわたってパリにおいて開催できたこと、さらにその成果を演劇誌『テアトル／ピュブリック』の特集号（Shintaro Fujii

et Christophe Triau (dossier réalisé par), *Théâtre/Public*, no.198, « Scènes françaises, scènes japonaises / allers-retours », 2010)としてフランスで出版することができたこと、さらに、芸術文化環境研究コースの活動の締めくくりとして、論文集『芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策』（伊藤裕夫・藤井慎太郎編著、論創社、2012年3月）を出版できる見通しになったことには、率直に喜んでいる。事業推進担当者、客員講師、研究協力者、研究生、事務局スタッフをはじめ、支えて下さったみなさんに深く感謝申し上げます。特に長嶋由紀子、光岡寿郎の歴代研究助手には、とりわけ大きな感謝を捧げたい。

(事業推進担当者 藤井慎太郎)

■連続講座 アウグスト・ボアールと「被抑圧者の演劇」

日時：2011年11月15日（火）～11月19日（金）18:00～21:00

第1夜 「被抑圧者の演劇」の理論と方法

第2夜 イギリスにおける「被抑圧者の演劇」の実践

第3夜 ボアールの「イメージ・シアター」

第4夜 総括討論 ボアールの演劇思想と実践

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室ほか

講師：エイドリアン・ジャクソン（演出家／カードボードシィズンズ芸術監督）ほか

企画・司会：松井憲太郎（GCOE客員講師）

■文化の復興／文化による復興～震災後の文化政策を考える（日本文化政策学会との共催）

日時：2011年12月16日（金）18:30～21:00

場所：早稲田キャンパス22号館203教室

パネリスト：

細井崇久（仙台市文化振興課長）

岸浪行雄（株式会社東北共立代表取締役）

大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室）

島添貴美子（富山大学准教授）

松本茂章（静岡文化芸術大学教授）

伊藤裕夫（GCOE客員講師）

司会：松森隆一（嘉悦大学教授）

■舞台芸術における人材育成（国際シンポジウム「ACTING—演じるということ」分科会）

日時：2012年1月28日（土）13：30～15：30

場所：早稲田大学国際会議場第二会議室

講師：大楽亮（ピッコロシアター副館長兼劇団部長）

ペーター・ゲスナー（桐朋学園芸術短期大学准教授／うずめ劇場）

伊藤裕夫（GCOE 客員講師）

松井憲太郎（GCOE 客員講師）

司会：藤井慎太郎（GCOE 事業推進担当者）

■連続セミナー <所有>からアートと社会の関係を考える

日時：第9回 2011年11月21日（月）19：00～21：00

第10回 2011年12月5日（月）19：00～21：00

第11回 2012年1月16日（月）19：00～21：00

講師：曾田修司（跡見学園女子大学教授）

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室ほか

舞踊研究コース：

活 動 報 告

21世紀COE、グローバルCOEの10年間にわたる事業によって、日本の舞踊学は飛躍的發展を遂げたといっても過言ではない。舞踊コースの研究対象は、主に欧米の劇場舞踊と日本のコンテンポラリーダンスであるが、とくに前者については、当然のことながら、欧米における知の蓄積には逆立ちしても叶わない。

GCOEのおかげで、イギリスのランズデール、ドイツのブランドシュテッター、アメリカのフォスター、マニング、ガラフォラ、フランスのロネといった、世界的に有名な舞踊学者たちの口からじかに、世界の舞踊学の最新の成果について教えられたことは、ガラパゴス化したわが国の研究者にとっては、他では得難いことであった。研究生たちもじつに幸運だったといわねばならない。

また、昨今どの大学でも研究費が削減されているなかで、GCOEの助成により、海外の学会での研究発表や、海外のアーカイヴズへの調査出張ができ、これもまたわが国の舞踊学の発展に大きく寄与したと確信している。コースリーダーである私自身も大きな研究成果を挙げることができた。

また、小林奈央子、稲田奈緒美、川島京子、平野恵美子の4名が博士号を授与され、舞踊学者として独り立ちした。

最後の年には、舞踊コースの研究成果を世に問うものとして、『バレエとダンスの歴史』を刊行することもできた。

今後の課題は、そうした成果を広く日本の舞踊界全体にどう還元していくか、また、いかにしてこれを次のステップへと繋いでいくか、ということになるだろう。

（事業推進担当者 鈴木晶）

■フ란ツ・アントン・クラマー氏講演会 「ドイツにおけるダンスシアターからコンテンポラリーダンスへ—ピナ・バウシュを超えて」

日時：2011年12月7日（水）18：30～20：30

場所：早稲田キャンパス10号館105教室

講師：フ란ツ・アントン・クラマー（ベルリン大学連合ダンスセンター客員教授）

後援：Goethe-Institut Villa Kamogawa

「ドイツにおけるダンスシアターからコンテンポラリーダンスへ——ピナ・バウシュを超えて」と題してフ란ツ・アントン・クラマー氏にご講演いただいた。ピナ・バウシュの大成功によって海外からは見えにくくなってしまったピナ・バウシュ以外のダンスを1920年代のドイツにおけるモダンダンスにま

で遡って解説された。ラバン、ウィグマンというドイツ表現主義舞踊から、ラバンの弟子であるクルト・ヨース、ピナ・バウシュへの流れがまず確認された。他方で、ピナ・バウシュの影に隠れて見えにくくなってしまっている振付家として、ゲルハルト・ブーナーというバウハウスの影響を受けた振付家、ヨースの弟子であったスザンヌ・リンケらを時に映像を交えて紹介された。またピナ・バウシュのタンツテアターの後にくるコンテンポラリーダンスの担い手としてライムント・ホーゲ、メグ・スチュアート等をやはり映像を交えて紹介された。日本からでは見えないドイツのダンスの歴史と現在のダンス状況をしる貴重な講演会となった。

■国際シンポジウム分科会 「ダンス・コンポジションの解剖学」

日時：2012年1月28日（土）10：00～12：00

場所：早稲田大学国際会議場第三会議室

講師：エリン・ブラニガン（ニュー・サウス・ウェールズ大学専任講師）

司会：鈴木晶（GCOE 事業推進担当者・法政大学教授・早稲田大学客員教授）

コメンテーター：石井達朗（GCOE 研究協力者・慶應義塾大学名誉教授）

「ダンス・コンポジションの解剖学」と題してブラニガン氏にご講演頂き、その後石井達朗氏とディスカッションして頂いた。ブラニガン氏は現在進行中のプロジェクトであるダンス・コンポジションの解剖学を紹介した上で、イヴォンヌ・レイナーの《Trio A》という作品を例にあげてその分析を例示された。ダンス・コンポジションの解剖学のプロジェクトとは、他のジャンルの芸術由来ではないラバンが定義した身体に基づく4つの概念（breath, weight, tone, flow）を元にダンス・コンポジションを解明する試みである。本講演では特に“tone”に焦点をあてて分析を加え、《Trio A》という作品が、“tone”を平板化することで表現を拒否する作品であることを明らかにされた。石井氏は、まず日本と世界におけるコンテンポラリーダンスの状況を概観され、コンテンポラリーダンスが一つの技術に基づくのではなく、領域横断的なものであることを説明された。さらに“tone”という概念を巡ってブラニガン氏とディスカッションして概念を精密化した。最後の会場との質疑応答では幅広いテーマが話し合われる活発な会となった。（研究助手 渡沼玲史）

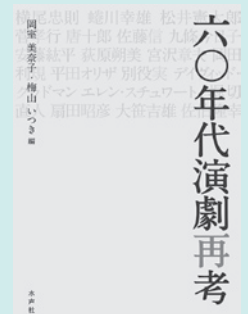
新 刊 紹 介

『六〇年代演劇再考』

(岡室美奈子・梅山いつき編著 水声社 2012年3月刊行)

本書は2008年に開催した「国際研究集会・60年代演劇再考」の記録集である。本研究集会は唐十郎氏、蜷川幸雄氏、佐藤信氏といったいわゆる「アンガラ四天王」に数えられる演劇人の方々と一堂に会したこれまでにない企画であった。またアメリカの前衛演劇の拠点、ラ・ママ実験劇場主宰エレン・スチュワート氏にもお越しいただくとともに、後続の演劇人として平田オリザ氏、宮沢章夫氏、岡田利規氏によるパネルディスカッションも開催。60年代演劇とはなんだったのか。本書はアンガラ演劇を支えた巨人たちと批評家たち、そして後続の演劇人と関係者が一同に会し、当時の躍動感を伝えるとともに60年代の実態に迫る決定的保存版である。

(GCOE 研究生 梅山いつき)



『サミュエル・ベケット! —これからの批評—』

(岡室美奈子・川島健・長島確編著 水声社 2012年3月刊行)

本書は、2002年から21世紀COEプログラムとグローバルCOEプログラムをととして十年にわたって活動してきたベケット・ゼミの成果である。ベケット・ゼミは、21世紀COE西洋比較演劇研究コースの初代と二代目の客員研究助手を務めた長島確、川島健を中心に、全国の大学の大学院でベケットを研究する気鋭の若手研究者たちが毎月一回集まって研究発表とディスカッションを行う活発なゼミとして成長してきた。本書には、「不条理劇」とはまったく異なる地平からベケット研究を開始した若い世代の斬新な発想と柔軟な思考力と豊富な勉強量が凝縮されている。本書に収録されたすべての論文から、ベケットの作品にまっすぐに向き合い、新たな発見にドキドキしながら記述する若い執筆者たちの鼓動が読者に伝わるだろう。本書表題『サミュエル・ベケット! —これからの批評—』の「!」にはそんな願いが込められている。

(事業推進担当者 岡室美奈子)



『バレエとダンスの歴史』

(鈴木晶編著 平凡社 2012年3月刊行)

5年間(21世紀COEも含めると10年間)にわたるGCOEの研究成果を世に問うため、大学院レベルの舞踊史教科書を出版することにした。もっと個別専門的な文献を出版すべきではないかというご批判もあろうが、舞踊は演劇に比して、学術文献の数が圧倒的に少ないため、教科書の出版こそが急務であると判断したのである。直接的には2010年度に5回にわたって開催したバレエ研究プロジェクトの成果である。タイトルにある「ダンス」とは20世紀ダンスのことであり、舞踊史といっても、欧米の劇場舞踊に限定された舞踊史である。これで、研究者をめざす学生は最低限この教科書の内容を習得していなければならない、という一応の基準ができたと自負している。むしろ舞踊研究は舞踊史に限られるわけではなく、作品分析など、他の方法論はいろいろあるし、また劇場舞踊以外の舞踊も無数にある。やらなくてはならないことはまだまだたくさんあるが、どんなことも最初の一步から始まる。

(事業推進担当者 鈴木晶)



『芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策』

(伊藤裕夫・藤井慎太郎編著 論創社 2012年3月刊行)

本書は、芸術文化環境研究コースの5年間にわたる研究成果の一環として企画されたものである。芸術文化環境研究コースでは、芸術文化を支える環境を多角的な視点から検討するために、国内外の文化政策やアート・マネージメントに関する研究会を数多く実施してきたが、そのなかでも特に「演劇と近代日本」(2008～9年度)、「文化外交再考」(2010年度)、「舞台芸術と人材育成」(2010～11年度)といった連続研究会のテーマに沿いながら、さらにその内容を発展させた論考を収めている。すでに第一線で活躍されている研究者・専門家からグローバルCOEを通じて研鑽を積んだ若手まで、幅広い書き手がそれぞれに力のこもった原稿を寄せて下さった。初学者にも専門家にも役立つことを心がけたので、ぜひ多くの方に手にとって頂ければ幸いである。

(研究助手 光岡寿郎)

now printing

『浄瑠璃と謡文化—宇治加賀掾から近松・義太夫へ』

(田草川みずき著 早稲田大学出版部 2012年3月刊行)

人形浄瑠璃や歌舞伎など新しい芸能が誕生した近世期は、中世に完成をみた能楽が、「謡」として一般の人々に大いに享受された時代でもある。義太夫節人形浄瑠璃が新興芸能として成立したのは、こうした謡文化隆盛の、まさに只中のことであった。

本書は、義太夫節の創始者・竹本義太夫と近松門左衛門が、ともに深い影響を受けたと考えられている、古浄瑠璃太夫・宇治加賀掾と謡文化の関わりを出発点としている。従来、加賀掾の過剰ともいえる謡への傾倒は、新興芸能の担い手としての、主体性の欠如と捉えられてきた。しかし本書においては、その浄瑠璃芸論や正本節付の検証を通じて、加賀掾が、先行する能楽(謡)と謡文化に対し安易に依存するのではなく、深い知識を獲得した上で、自らの浄瑠璃の規範としたことを論じた。

本書中では、加賀掾のこうした姿勢が、義太夫や近松に少なからず受け継がれていることも指摘している。本書の刊行により、浄瑠璃と謡文化をめぐる諸問題が、今後新たな様相を以て立ち顕れて来ることを期したい。
(GCOE 研究協力者 田草川みずき)



『日本バレエの母 エリアナ・パヴロバ』

(川島京子著 早稲田大学出版部 2012年3月刊行)

日本へのバレエ移植者である白系ロシア人エリアナ・パヴロバ(1897-1941)は、1919年来日し、日本初のバレエ学校「パヴロバ・バレエスクール」を設立、日本のバレエ界に初めての弟子を残し、日本バレエを起動させた。その後、現在に至る日本バレエの系譜図はエリアナ・パヴロバを頂点として形成されてきたといえ、エリアナは「日本バレエの母」と称されている。当時、バレエが西洋芸術受容時代の文化政策から完全に疎外された中で、エリアナのバレエは民間における稽古事文化の中に組み込まれ、西洋芸術であるバレエは、日本的な芸道システムと絡まりあい、極めて特殊な形で根付くこととなった。本書は、現存する資料を元に彼女に関する史実を確定しつつ、彼女によって実現された日本へのバレエ移植の手法(学校制度、指導法、上演活動、上演作品など)の詳細について明らかにし、さらに現在の日本バレエの特殊性との因果関係を考察したものである。

(GCOE 研究協力者 川島京子)



『日本映画草創期の興行と観客』

(上田学著 早稲田大学出版部 2012年3月刊行)

本書は、日本において映画製作が本格化していった20世紀初頭に、映画の興行と観客の変化が、その背景でいかに進行していたのかを明らかにするものである。具体的には、巡回興行が国内各地で大きな成功をおさめた日露戦争期(1900年代中期)と、主要都市で映画館が出現していった1900年代後期を対象に、興行と観客の比較をおこない、その差異を考察した。また、本書では主に東京と京都の事例を論じたが、それは同時期の両都市の地域性が、その後の映画製作の拠点化と、その方向性の差異化にも作用したと考えるからである。

いわゆる初期映画から物語映画への移行期は、本書が対象とする興行や観客についての議論も含め、映画史において、近年、国際的に最も研究が進んだ分野である。ところが日本の映画・映像学では、国内の事例に即した研究が深まったとは言い難いのが現状である。本書が、そのような議論の蓄積に、ささやかに寄与することができれば、著者として幸いである。
(演劇博物館助手・GCOE 研究生 上田学)

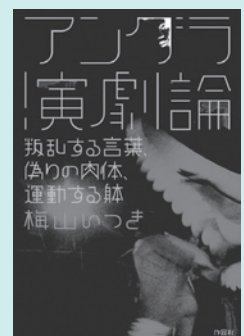


『アングラ演劇論—叛乱する言葉、偽りの肉体、運動する軀』

(梅山いつき著 作品社 2012年3月刊行)

これまでアングラ演劇は「肉体の演劇」と漠然と捉えられてきたが、実は活発な言語活動を展開した「言語の演劇」でもあった。本書はアングラ演劇の豊かな言語活動に着目し、言語の側面からアングラ演劇における身体を表象を捉えなおそうとするものである。アングラ演劇は日本の現代演劇に転換点をもたらしたとされ、数々の舞台が後世に与えた影響は大きい。これまで学術研究の場で積極的に取り上げられることは少なかった。本書は未だその実態が明らかにされていないアングラ演劇について、一次資料を丹念に読み解くことによって活動を紐解き、作品分析を通じてこれまでのアングラ演劇のイメージをあらたに更新することを目指すものである。

(GCOE 研究生 梅山いつき)



編集後記

ニューズレター第13号をお届けいたします。2007年度よりグローバルCOEの研究活動をお伝えしてきたニューズレターも最終号を迎えることになりました。この5年間グローバルCOEを支えて下さった全ての皆さんに、改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

(研究助手 光岡寿郎)

News Letter 第13号

2012年3月15日

編集：光岡寿郎 奥香織 菊地浩平 大傍正規 原田真澄 山本律 李宛儒 渡沼玲史

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html>